

30. 肺扁平上皮癌における血清 SCC 抗原測定の臨床的意義——特に経過観察における有用性について——

美濃 直子 阿多まり子 山本 昌也
下野 礼子 大谷 治彦 伊東 久雄
石根 正博 河村 正 飯尾 篤
浜本 研 (愛媛大・放)

原発性肺癌 111 例について血清 SCC 抗原を測定し、本抗原が子宮頸部のみならず肺の扁平上皮癌においても比較的特異性の高いマーカーであることを確認した。また臨床病期別では III, IV 期の進行例では高値を示したが、早期例では半数以上が正常値をとっており、早期診断法としては限界が認められた。一方肺扁平上皮癌について手術や放射線治療後の血清 SCC 抗原値の変化は、腫瘍の縮小程度とよく相関しており、さらに再発の認められた症例では高値となっており、これらの経過観察には有用なマーカーであることが認められた。

31. Osteocalcin RIA の基礎的および臨床的検討

永井 清久 福永 仁夫 大塚 信昭
古川 高子 森田 陸司 (川崎医大・核)

オステオカルシンは、骨の非コラーゲン蛋白の約 15% を占めるビタミン K、およびビタミン D 依存性蛋白であり、各種代謝性骨疾患における意義が検討されている。われわれは、オステオカルシン RIA kit (ミドリ十字) を試用する機会を得、基礎的・臨床的検討を行った。基礎的検討では、高濃度検体の希釈法に検討の余地を認めたが、総じて良好な測定系をなしていた。臨床的には、健康者成人の血清中オステオカルシン値は、男性 4.2 ± 1.6 ng/ml、女性 4.4 ± 1.7 ng/ml であり、甲状腺機能亢進症、原発性副甲状腺機能亢進症、骨粗鬆症では高値を示す症例が多く、甲状腺機能低下症では低値を示す傾向がある。慢性腎不全症例では著明な高値を示す例が多く、血清オステオカルシン値は腎機能を考慮して解釈すべきである。前立腺癌症例で特に高値を示すのは骨転移を有する症例であり、follow-up に有効と考えられた。以上のように臨床的に有用性が認められた。

32. 1,25 (OH)₂D の radioassay の基礎的検討

古川 高子 福永 仁夫 大塚 信昭
森田 陸司 (川崎医大・核)

Vitamin D の最終活性型である $1\alpha,25(\text{OH})_2\text{D}$ の血中濃度測定を試み、基礎的な検討を行った。

土光らの方法に準じ、血清中の $1\alpha,25(\text{OH})_2\text{D}$ を、 $\text{CH}_2\text{Cl}_2 : \text{Acetone} = 9 : 1$ による抽出、および HPLC を用いて分離、精製した後、radioreceptor assay を行った。Assay の最小検出感度は 2 Pg/tube, intraassay, interassay の CV は、9.3 および 6.6%、回収率は 80~110% であった。本方法により測定した正常者 9 名の血清中 $1\alpha,25(\text{OH})_2\text{D}$ 濃度は 15~85 Pg/ml に分布し、平均は 45 Pg/ml であった。以上の基礎的検討により、臨床使用に耐える測定法を確立したものと認めた。

33. IgE キット “第一” S の基礎的検討

清水 誠三 宇佐美政栄 柴辻 一成
小林 有基 (岡山済生会総合病院)

マイクロセファロース二抗体法を用いた IgE キット “第一” S について若干の検討結果を報告する。

【結果】 標準曲線、キット内およびキット間の再現性はいずれも C.V. = 12.1% 以下と良好であった。反応条件は温度 15~30°C 以内、第一反応時間 2.5~24 時間、第二反応時間 0.5~2 時間内であれば問題なく測定できる。回収率は 100.2~105.4%、希釈試験は理論値からの解離 -6.7~11.2% と良好であった。IgE キット “第一” との相関は、 $y = 1.041x - 11.955$, $r = 0.998$ と良好であった。その他キットの経時的安定性もすぐれている。本キットの正常値は 80~400 U/ml で従来法と同じであり、疾患例では、喘息 61.9%、ネフローゼ症候群 53.3%、アトピー性皮膚炎 64.3% が高値に測定された。

【まとめ】 本キットは従来のセファデックス法に比べ、1) 操作時間の短縮、2) 測定範囲の拡大、3) 被検血清のダイレクト測定、その他の利点がある。また、検討結果にも問題なく、本キットは日常の検査法としてすぐれたキットと結論できる。